

第三十二回千葉県支部 俳句大会成績

令和三年四月二十九日

俳人協会千葉県支部長賞

遠足の子らの返事は手を上げて

平野みち代

若潮賞

道化師の素顔に戻る寒さかな

新津 黎子

菜の花賞

豆打つや闇のうしろにある闇へ

荒井ハルエ

優秀賞

雪だるま眼もらひし方を見る

原 瞳子

秀逸賞

ふらここの少女いつしか風になる

荒井ハルエ

鯨飛ぶがばりと海を剥ぎ取りて

唐笠 俊郎

一本の水持ち歩く原爆忌

橘 良彦

春愁の顔ざぶざぶと洗ひけり

西野 桂子

佳作

鱸綱も丸めて干され安房の春

藤崎美代子

玫瑰や番屋に古りし潮暦

鈴木 由江

からくりの寄木の小篁つばめ来る

児島 千枝

空蟬といふアリバイを残しけり

大関 靖博

会話するロボットと春惜しみけり

村田美穂子

ぽつぺんを仏に吹いてをりしかな

酒井 裕子

安房二月海女が花売るほまち畑

古居 芳恵

透析の時間は修業凍曇

金子まもる

神の湖へ一矢はなてり弓始

藤井 元基

涼しくて良き音立つる陶器市

福井 隆子

鰯干す風と日ざしの九十九里

前田 播州

滝落ちて水の百態ありにけり

葛西 茂美

住みつきし蟻に声かけ庭仕事

遊佐とよ子

菜の花にもはや戻れぬ蝶であり

相川 健

窓近く耀歌の山や初句会

原 瞳子

紙を漉く水を励まし水宥め

原 瞳子

鶏の貌あげて生む寒卵

張替 和子

身に入むや病室にわが咀嚼音

川又 和子

城垣の石の百相松の芯

土屋 恒雄

菜の花や古寺に伊八の波しぶく

土屋 恒雄

去年今年日付変更線のやうなもの

大島 宏

野施行の餅ひび割れて石の上

赤堀 洋子

各選者特選句

松尾 隆信選（特別選者）

良く動く十指勤労感謝の日

佐々木リサ

鯨飛ぶがばりと海を剥ぎ取りて

唐笠 俊郎

大串 章選

病棟の配膳の音暮早し

唐笠 俊郎

小倉 英男選

浜小屋の北窓ふさぐ荒筵

鈴木 由江

下鉢 清子選

日向ぼこ明日もきつと普通の日

関戸 信治

能村 研三選

今にあれ千葉にならひの千葉笑ひ

大澤 雅之

増成 栗人選

ふらここの少女いつしか風になる

荒井ハルエ

村上 喜代子選

亀鳴くや三度目に合ふパスワード

山口ひろよ

大野 崇文選

清明や魁夷の道は空へ抜け

村上喜代子

飯田 晴選

安房二月海女が花売るほまち畑

古居 芳恵

葛西 茂美選

十二月電飾の灯のぽびぷべぽ

北村 操

町山 公孝選

銭湯のけぶり真つ直ぐ寒北斗

古谷 誠司

蓮井 崇男選

握りきし母の手離し入学す

三代川玲子

中山 和子選

道化師の素顔に戻る寒さかな

新津 黎子

伊藤 素広選

秋の暮庭より客を招き入れ

岩佐 梢

内海 良太選

遠足の子らの返事は手を上げて

平野みち代

大関 靖博選

一葉忌しあはせ過ぎぬやうに生き

飛田小馬々

金子日出子選

積み上げる堆肥の湯気の初景色

月岡 千秋

北川 昭久選

鱸綱も丸めて干され安房の春

藤崎美代子

栗原 完爾選

一本の水持ち歩く原爆忌

橘 良彦

古堀 豊選

春耕の棚田の神は石一つ

田中 臥石

酒井 裕子選

弔鐘の木の葉しぐれとなりにつけり

高橋 健文

すずき 巴里選

幼稚園バス夏帽子だけ見えて

葛西 茂美

染谷 秀雄選

摘んで煮てわづかばかりやつくしんぼ

榎 利風

高橋 健文選

豆打つや闇のうしろにある闇へ

荒井ハルエ

谷口 摩耶選

バッハ弾く第一音の淑気かな

長阪 信子

寺島 ただし選

道化師の素顔に戻る寒さかな

新津 黎子

仲村 青彦選

ふらここの少女いつしか風になる

荒井ハルエ

西岡 三四郎選

釣人の背ふつくらと日脚伸ぶ

箕輪カオル

原 瞳子選

昼過ぎの正月風の浜辺かな

江澤 茂子

飛田 少馬々選

冬眠やみな風音に丸くなる

沢辺たけし

平野 みち代選

浜小屋の北窓ふさぐ荒筵

鈴木 由江

藤埜 まさ志選

寒紅を引き夫に会ふオンライン

吉永寿美子

前北 かおる選

ほつぺんを仏に吹いてをりしかな

酒井 裕子

松澤 美鈴選

清明の光の中へブーケトス

本池美佐子

甕 秀磨選

寒紅を引き夫に会ふオンライン

吉永寿美子

望月 百代選

ほつぺんを仏に吹いてをりしかな

酒井 裕子

森 祐司選

塚二つすみれの丘となりにつり

萩原 敏子

山部 淑子選

冬ぬくし抽斗奥の母子手帳

鶴見 秀昭

山本 よう子選

霊園に仏の妻と日向ぼこ

古堀 豊